

奈文研

ニュース

No.50

Sep.2013

NABUNKEN NEWS



「平城宮跡発掘調査部」50年

1952年に設立された奈良文化財研究所は、1954年の通称「一条通」での発掘調査を皮切りに平城宮跡の発掘にたずさわることとなり、1959年からは平城宮跡の発掘調査を継続的に実施するようになります。そうしたなか、平城宮跡西南隅に電車検車区が計画されたことに端を発する保存運動が高まり、1963年には平城宮跡全域の史跡としての保存と国費による土地買い上げ並びに継続的な発掘調査の方針が決定、平城宮跡発掘調査部が発足したのです。以来50年、2006年には組織改編にともない都城発掘調査部（平城地区）と名称を変更しましたが、継続的に平城宮跡の発掘調査とそれにもとづく各種研究を進めてきました。

膨大な研究成果のうち、平城宮の解明という点でとりわけ大きな意味を持つと思われる二点について紹介しておきましょう。まず、第一次大極殿について。明治時代以降の平城宮研究では、地上に盛土状の痕跡をとどめていた第二次（東区）大極殿跡が平城宮の大極殿であると考えられていました。ところが、現在の第一次（中央区）大極殿地区の調査で巨大な建造物の基壇の痕跡が検出され、これこそが平城遷都直後に造営された大極殿であり、東のものは奈良時代後半のそれであることがあきらかにされたのです。その後、考古学・歴史学・建築史学等の緻密な研究を経て、第一次大極殿が復原されたこと

は皆様もご存じのとおりです。もう一つは、平城宮跡東張り出し部の「発見」です。国道24号線のバイパスが平城宮跡東辺沿いに計画されたことにもなる事前発掘調査で、平城宮の東辺に沿って南北に貫通するはずの大路が南面する平城宮の門により途切れていたことがわかりました。正方形と考えられていた平城宮が東に張り出しを持つことがあきらかになったのです。くわえて、その張り出し部東南隅では奈良時代の庭園の遺構が良好な状態で見つかり、東院庭園と名付けられたこの庭園も庭園史学や建築史学等の研究にもとづき復原整備されました。

更に、古代史の解明という点では木簡の研究もきわめて重要な成果です。平城宮跡で木簡がはじめて発見されたのは、平城宮跡発掘調査部発足前の1961年。その後、宮跡内の各所や平城京内の長屋王邸跡等で多数の木簡が出土し、その解説にもとづく研究は奈良時代の政治や生活の実態をあきらかにし、文字通り古代史を書き替える資料となったのです。

私達の調査研究の特色は、考古学をはじめとした様々な分野の研究者が共同で発掘調査をおこない、多様な観点から研究をおこなうことです。更に、中国や韓国の研究機関とも緊密な協力関係を構築し、東アジアの視点も大切にしています。このような研究スタイルをもとに、今後も奈良時代の歴史の実像をあきらかにし、その成果を様々な形で皆様にお伝えしていきたいと考えています。

（副所長 小野 健吉）



第一次大極殿西様の発掘遺構



東院庭園の発掘遺構

発掘調査の概要

藤原宮跡朝堂院朝庭の調査（飛鳥藤原第179次）

朝堂院は大極殿院の南に位置しており、回廊に囲まれた東西235m・南北320mの空間です。内部には、中央広場である朝庭を取り囲むように12棟の朝堂が配置されています。ここでは官僚が仕え、政務や儀式を執りおこなっていました。

奈良文化財研究所では、この朝堂院朝庭の空間利用のあり方を検討するとともに、下層に存在する藤原宮造営期の実態をあきらかにするために、近年、朝庭の発掘調査を継続的に進めています。

これまでの調査では、朝庭は最終的に拳大の礫を敷き詰めて整備されていることがあきらかになっています。更に、その下層の調査では、藤原宮の造営にかかわる遺構が見つかっています。なかでも注目されるのは、南北に流れる運河や沼状の遺構です。現在、各遺構から出土した多量の木屑を整理して、分析を進めているところですが、これらの遺構は木材の搬入経路や加工場所として利用されていたのではないかと考えています。もう一つ興味深いこととして、下層から複数の掘立柱建物が見つかっています。これらの建物群の全貌は不明ですが、藤原宮造営にかかわる仮設の建物群と想定しています。



調査区全景（南東から）

こうした成果を受けて、今年度は、昨年度の発掘調査区（飛鳥藤原第174次調査）のすぐ北側に調査区を設定し、2013年4月8日から発掘調査を実施しています。調査面積は1,430㎡です。

今回の調査でも、一面に広がる礫敷を検出しました。くわえて調査区中央では、東西方向の溝が見つかりました。この溝はこれまでの調査でも確認しており、溝の中に礫を詰めた暗渠（あんきょ）であることがわかっています。当時の人々が礫敷の排水にも気を配っていたことがわかります。

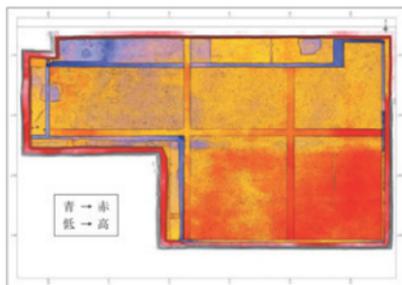
また、昨年度同様、3次元レーザー測量をおこない、礫敷上にあらわれた微地形を立体的に記録しました。その結果、調査区の南半が高く（下図の赤色の部分）、西半が低くなっていることがわかりました（青色の部分）。当地周辺は南が高く北が低い地形となっているため、調査区南半の高まりはこうした地形を反映しているとともに、東西方向に走る排水溝への集水も意識しているように感じられます。

いっぽう、調査区西半は、下層に斜行溝等の存在が推定される位置にあたります。下層に大きな溝や土坑等がある場合、その上層の地面が沈下する現象がみられることがあります。今回の計測結果も、下層に遺構があるために、上層の礫敷が沈下したものと読み取ることができるのかもしれませんが。

5月末をもって当調査は一時中断していますが、秋から再開し、部分的に礫敷の下層を調査する予定です。掘立柱建物群や沼状遺構の広がりを確認し、それらの性格をあきらかにしていきたいと思えます。

今後の調査の進展にご期待ください。

（都城発掘調査部 和田 一之輔）



朝庭礫敷面の標高グラデーション図（上が北）

法華寺旧境内の調査(平城第514次)

今回の調査区は、現在の法華寺境内の南方、平城宮東院庭園の東方にあたり、奈良時代の法華寺の南東隅に位置します。すぐ西側では大規模な石敷の苑池等が見つかり、光明皇后の一周忌がおこなわれた阿弥陀浄土院とされています。周辺ではこれまでの小規模な調査でも、太い掘立柱の根元や奈良三彩の瓦が見つかっており、どのような建物が展開していたのか注目されてきました。昨年度におこなった第501次調査では、数期におよぶ掘立柱建物を発見しており、今回は、この成果をもとに7カ所におよぶ調査区を設定しました。

調査の結果、奈良時代の掘立柱建物や瓦溜り等の遺構が見つかり、大型の掘立柱建物が建ち並んでいたこと等があらかになりました。しかし、部分的な調査にとどまったため、具体的な建物規模や配置まであらかにすることはできませんでした。奈良時代の遺物としては、とくに南寄りでは、緑、白、褐色に彩られた奈良三彩の瓦が多く出土しました。軒平瓦は同じ坪でこれまで出土しているものと同型式のものです。また、奈良三彩の鬼瓦も出土し、平城宮に準ずる三彩瓦葺きの建物があった可能性が高まりました。更に、今回の調査では室町時代後半頃から江戸時代の溝が、この地域を取り囲むように巡ることもわかりました。溝の堆積土からは「かわらけ」と呼ばれる土師器の皿や箸、漆器、曲げ物、下駄等生活用品が多数出土し、この周辺に集落が形成されていたことがあらかとなりました。平城宮周辺での集村化の実態を考えるうえで、きわめて重要な発見といえます。

(都城発掘調査部 神野 恵)



瓦溜り(南西から)

平城京左京三条一坊一・二坪の調査(平城第515次)

朱雀門のすぐ南東、朱雀大路に面する一角は、緑地公園として利用されていました。平城京の条坊でいえば左京三条一坊にあたります。ここに国土交通省によって平城宮跡展示館(仮称)の建設が計画され、2010年度から継続的に発掘調査をおこなっています。これまでの調査で、奈良時代前期には鉄鍛冶工房や多くの掘立柱建物が営まれ、その後は坪を囲う築地塀を持たない広場のような利用の仕方がなされたことがわかっています。今回は水路の付け替え部分の調査で、南北2カ所の調査区を設定しました。北調査区は東西12m、南北10mの120㎡、南調査区は東西12m、南北12mの144㎡です。調査期間は2013年5月16日から5月31日でした。

どちらの調査区も既設の水路用コンクリートボックスによって遺構面の一部が破壊されていましたが、その他の部分の遺構の遺存状態は比較的良好でした。特に南調査区では一坪と二坪を区切る三条条間北小路とその南側溝を検出しました。また、新たに古墳を1基検出しました。古墳は周壕だけが残っており、墳丘はすべて失われていました。周壕の大きさから径10mほどの円墳であったとみられます。周囲からは円筒埴輪や形象埴輪片が出土しており、出土した須恵器とあわせて古墳時代後期前半(6世紀前半)の古墳と考えています。周囲の埋土の状況から、平城京の造営にともなって墳丘が削平され、周壕が理め立てられたと考えられます。今回の調査により、平城京造営以前の土地利用のあり方や、京の造営による土地改変の一端があらかとなりました。

(都城発掘調査部 川畑 純)



古墳の周壕と三条条間北小路南側溝(南東から)



内山永久寺の扁額

内山永久寺の扁額



寛治元年九月用之

金剛乘院
白紙
 内山真七堂頼子で授けし

寛治元年九月用之

①



金剛乘院
 内山頼

②

「扁額集」の字（陽明文庫所蔵）

昔、天理市に内山永久寺というお寺がありました。大和国屈指の大寺院でしたが、明治維新の廃仏毀釈のときに、跡形もなくなってしまいました。ところが地元の家で、その寺のものと言いつたえられている扁額が残っていました。左ページの写真です。見るからに古そうな額に、変わった字体で「金剛乘院」と書いてあります。

奈良文化財研究所で調査をすると、まず、額縁の向かって左側の部材は、現在1218年までの年輪が残り、その外側は30年分くらいの年輪が削り取られていると想定できました。したがって、1248年前後に伐採されたこととなります。

更に、右ページの①②の写真を見てください。これは京都の公家の近衛家に伝わった古書、「扁額集」の一部です。「扁額集」とは、昔の書家が集めた、扁額の字の手本集です。「扁額集」によると、これらは弘誓院流の祖の書家である藤原教家が、宝治元年(1247)9月に筆を執ったもの。①②とも内山永久寺の扁額として記したものの、①を真言堂の額に採用し、②は採用しなかったと書いてあります。実際、左ページと見比べると、①はそっくりです。鎌倉時代の1247年に書家に字を書いてもらい、すぐにその字を板に写して扁額を作ったのでしょう。

実態がほとんど分かっていない内山永久寺の歴史に光をあてる資料です。このような鎌倉時代の貴重な資料が、ひっそりと地元で守り伝えられていたとは驚きです。

(文化遺産部 吉川 聡)

飛鳥・藤原40年の春秋

最近知ったことですが、奈良県産の「ヒノヒカリ」は、全国米品評会で特Aランクの評価を得ている美味しい米です。この米生産を支える灌漑用水が、吉野川分水です。吉野川分水路線の建設に際し、飛鳥地域では多くの重要遺跡が通過対象となり、それを契機として遺跡の調査が始まりました。1956年以来、国の要請を受け、当時の奈良国立文化財研究所が平城宮跡の発掘調査を中断して、飛鳥寺や川原寺、伝飛鳥板蓋宮跡を調査しました。それらの調査で大きな成果をあげたことは、皆さんご存知のとおりです。

その後、藤原宮跡を含む飛鳥地域の遺跡の調査と保存は、国家的事業として実施されることとなりました。奈良研は、1969年に藤原宮跡の調査を奈良県教育委員会から引き継ぎました。そして、1970年の飛鳥藤原宮跡発掘調査室の設立を経て、1973年4月12日に飛鳥藤原宮跡発掘調査部が総勢20名の人員で発足したのです。以後、飛鳥藤原地域の調査研究は、藤原調査部(現 都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区))が継続的におこなってきました。

当初の調査部は、藤原宮跡東南隅の一画に設けたプレハブの仮設庁舎住まいでした。人数も少なく、家庭的な雰囲気だったようです。私も新人時代に藤原調査部を訪ねると、プレハブの庁舎で歓待してもらった記憶があります。しかし、今では新庁舎が建ち、プレハブ時代を知る人もごく少数になりました。ちなみに、状態の良い3棟のプレハブは、現在



現庁舎と40年目の人びと

の庁舎の完成にともない、平城に「遷都」していきました。平城宮跡大極殿院の西方にある土器や瓦、木器のプレハブがそれです。唐招提寺の講堂を彷彿とさせます。

これまで藤原調査部は、藤原宮・京と飛鳥地域を2本の柱とし、調査研究を続けてきました。藤原宮・京の調査では、日本最初の中国式都城について様々なことをあきらかにしてきました。飛鳥地域では、寺院や石神遺跡、また、近年では甘樫丘東麓遺跡等、多くの遺跡で継続的な調査を続けてきました。山田寺では、タイムカプセルから出現したように、倒壊した回廊が見つかりました。世界最古の木造建築の発見でした。石神遺跡の一連の調査で確認した遺構群は、飛鳥の遺跡の重要性を改めて示したところでした。大官大寺、飛鳥稻園宮殿跡等でも、7世紀の歴史を語るに欠かせない成果を上げてきました。中大兄皇子が造った水時計の出現は誰も予想しなかったことでしたし、飛鳥池遺跡での富木銭の出土は、教科書を書き換える発見でした。幻の百済大寺の発見もありましたし、高松塚古墳とキトラ古墳の調査では、終末期古墳の研究に欠かすことのできない多くのことをあきらかにしました。このように、40年にわたる調査研究の蓄積は膨大なものがあります。

最近では調査部にも若い部員が増え、新たな視点や活力が生まれています。今後とも、これまでの蓄積をもとに、更なる調査研究と活用を進めていきたいと思っています。飛鳥藤原地域の遺跡は、何が出てくるかわかりません。そこが興味深い点ですが、40年を迎えても、まだまだ感うことばかりです。

(都城発掘調査部副部長 玉田 芳英)



甘樫丘東麓遺跡で検出した石版

談山神社における彩色と塗装の材料調査

日本には古くからの木造建造物が多数現存しており、日本の文化の一端を担っています。これは、状態の良い部材は残し、悪い部材は取り替えるといった伝統的な修理によるものといえます。修理に関する考え方は塗装についても同様で、長い年月の経年劣化によって剥離や粉状化した塗膜は掻き落とされ、新たに塗り直しをおこないます。この時使用される材料は、原則として過去の修理で使用されていた材料と同じものを用います。そのため、当時のような塗装材料が用いられていたかを正しく理解することは、修理において、とても重要な意味を持つといえます。

奈良県桜井市にある談山神社は、十三重塔等多くの建造物が重要文化財に指定されています。近年、談山神社の各建造物は、経年劣化にともない、平成の大修理がおこなわれました。

保存修復科学研究室では、権殿の内外装の彩色と塗装について80点以上の調査を実施しました。その結果、寛文または享保期の修理と思われる塗膜から、塗装材料として、油、松脂そして鉛が検出されました。この塗装については、修理に関する古文書から、「ちやん」というぬりにあたるのではないかと考えられています。この塗装は日が当たりやすい外装の部材で確認されましたが、内装の部材では確認されませんでした。当時の職人は、耐候性を考え、あえて油系の塗料を使用したのかもしれませんが。

現在の談山神社は修理も終わり、権殿は「ちやん」塗で美しく仕上げられました。四季を堪能できることで有名な談山神社ですが、「ちやん」塗の権殿は四季にどのように映えるのでしょうか。

(理蔵文化財センター 赤田 昌倫)



談山神社での蛍光エックス線分析の様子

平城宮跡資料館 秋期特別展

「地下の正倉院展—木簡学とはじめ」
「都城発掘調査部 平城宮・京発掘調査の50年」

1963年8月、真夏の平城宮跡の内裏北外郭官衙で、驚きの大発見がありました。後にSK820と名づけられるゴミ捨て穴から、約1,900点もの木簡が出土したのです。平城宮跡で初めて木簡が見つかったのは1961年1月のことでしたが、点数は数十点ほどでした。そこに、まさに空前の大出土。当時の調査員たちは興奮や喜びとともに、あるいはそれ以上に困惑を覚え、苦難に直面したことでしょ。

しかし、この発見は、日本の木簡研究を飛躍的に押し進める起爆剤となりました。SK820出土木簡には文書・付札・習書といった古代日本における木簡の典型的な用法が凝縮しており、これらの調査・研究を通して木簡学の礎が築かれたといっても過言ではありません。そして、それは、全国の出土木簡の総数が40万点に迫ろうとしている現在も、高い有効性を保っています。

今年の「地下の正倉院展」では、このSK820出土木簡を中心に、産声をあげたばかりの木簡学が大きな成長を遂げてゆく過程を描きたいと考えています。研究の最前線に立った調査員たちの四苦八苦・試行錯誤を追体験しながら、木簡研究の基礎部分についての理解を深めていただきたいと思ひます。

そして、奇しくもこの木簡の大発見となった年、1963年4月に、平城宮跡発掘調査部(現 都城発掘調査部(平城地区))が誕生しました。本年は、特別展と同時間開催で、「都城発掘調査部 平城宮・京発掘調査の50年」と題し、平城地区の発掘調査の歩みを写真で振り返ります。こちらもあわせてご覧ください。(都城発掘調査部 山本 祥隆/企画調整部 渡邊 淳子)



SK820発掘調査のようす ※展示情報は巻末ページ

**飛鳥資料館 竹内街道1400年記念/奈良文化財研究所都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区)設立40周年記念
秋期特別展「飛鳥・藤原京への道」**

今年には「日本書紀」に「難波より京に至る大道を置く」と記された推古天皇21年(613)から1400年目にあたります。また、都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区)の前身である飛鳥藤原宮跡発掘調査部が設立されて40周年の節目の年でもあります。そこで秋期特別展として、飛鳥と藤原京の道をテーマとする「飛鳥・藤原京への道」展を企画しました。

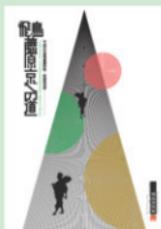
上ツ道・中ツ道・下ツ道・横大路・阿倍山田道といった古代の主要な道路は、大和と難波、あるいは磐余と飛鳥をむすぶ重要な交通路でした。これらの道は、のちに藤原京造営にあたって基準となり、条坊に取り込まれていきます。国内各地、あるいは外国へと、道を通して様々な人物が往来したことでしょう。

秋期特別展「飛鳥・藤原京への道」では、古代の道にかかわる物に焦点をあて、奈良文化財研究所の発掘調査成果を中心に、わかりやすく紹介します。(飛鳥資料館 成田 聖)

会 期：2013年10月18日(金)～12月1日(日)

開館時間：9:00～16:30(入館は16:00まで)会期中無休

ホームページ：<http://www.nabunken.go.jp/asuka/index.html> お問い合わせ：☎0744-54-3561(飛鳥資料館)



平城宮跡資料館 夏期企画展「平城京どうぶつえん」盛況でした!

初の夏休み子ども向け企画として開催した「平城京どうぶつえん」は、おかげさまで沢山の皆様に足を運んでいただきました。会場には、平城宮・京で発掘された様々な「どうぶつ」が並び、中央の天平ツリーのまわりで、土まぐりや人面土器ふくわらいなどの創作動物あそびを楽しむ親子連れの姿を数多く見かけました。ギャラリートーク「ハカセのおもしろどうぶつ講座」や「おやこワークショップ」に、熱心に通ってくれたリビーターのちびっ子達も。今までの専門的・学術的な展示とはひと味違った、出土品の見方、楽しみ方をご提供できたのではないかと感じています。(企画調整部 中川 あや・渡邊 涼子)



おやこワークショップ「どうぶつ絵本をつくらう」

次回 秋期特別展「地下の正倉院展—木簡学ことはじめ」/「都城発掘調査部 平城宮・京発掘調査の50年」

会 期：2013年10月19日(土)～12月1日(日) ※木簡は3期に分けて展示します

I期…10月19日(土)～11月1日(金) ギャラリートーク…10月25日(金) 14:30～

II期…11月2日(土)～11月17日(日) ギャラリートーク…11月8日(金) 14:30～

III期…11月19日(火)～12月1日(日) ギャラリートーク…11月22日(金) 14:30～

開館時間：9:00～16:30(入館は16:00まで) 休館日：月曜 ※11/4(祝)、11/5(火)は開館します

ホームページ：<http://www.nabunken.go.jp/heijo/museum> お問い合わせ：☎0742-30-6753(連携推進課)

■ お知らせ

飛鳥資料館 写真展

2013年9月7日(土)～10月6日(日)

第4回写真コンテスト「飛鳥川の導」

藤原宮跡資料室

2013年10月15日(火)～12月27日(金)(予定)

「飛鳥・藤原宮発掘調査の40年」

飛鳥資料館 秋期特別展

2013年10月18日(金)～12月1日(日)

「飛鳥・藤原京への道」

平城宮跡資料館 秋期特別展

2013年10月19日(土)～12月1日(日)

「地下の正倉院展—木簡学ことはじめ」

「都城発掘調査部 平城宮・京発掘調査の50年」

第113回公開講演会

2013年10月26日(土)於：平城宮跡資料館講堂

■ 記録

文化財担当者研修

○報告書作成課程

2013年7月11日～19日

27名

○災害痕跡調査課程

2013年9月9日～13日

12名

現地見学会

○飛鳥藤原第177次発掘調査(甘樫丘東苑遺跡)

2013年9月7日

1,122名

平城宮跡資料館 夏期企画展

2013年7月13日～9月23日

「平城京どうぶつえん」

18,616名

飛鳥資料館 夏期企画展

2013年8月1日～9月1日

「飛鳥・藤原京を考古学する」

2,633名

飛鳥資料館ミニ企画展

2013年9月10日～16日

「日光男体山のかかやき—山岳信仰奉養の世界—」

1,046名

第112回公開講演会

2013年6月29日

250名

特別講演会(東京会場)

2013年9月22日

408名

■ 最近の本

○「仁和寺史料 古文書編一・二」吉川弘文館 2013年8月

編集 「奈文研ニュース」編集委員会

発行 奈良文化財研究所 <http://www.nabunken.go.jp/>

Eメール jimu@nabunken.go.jp

発行年月 2013年9月